

A basic study on the involvement of design in anonymous architecture : The case of exterior design in apartment buildings

徳田, 光弘

<https://doi.org/10.15017/458542>

出版情報 : 九州芸術工科大学, 2002, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

第四章 マンション外装デザインに関する実態調査

1. 目的と分析方法
2. 調査地概略及び選定理由
3. 調査対象・方法
4. 玄関部
5. バルコニー部
 - 5-1 バルコニー躯体形状
 - 5-2 バルコニー手摺部
 - 5-3 躯体形状と手摺部の構成
 - 5-4 スリット形状・帯形状
6. 屋根部
7. 壁面部
 - 7-1 タイル使用面積
 - 7-2 タイル色彩
 - 7-3 タイル使用面積とタイル色彩の関係性
 - 7-4 コーナー強調タイプ
8. 外装デザインの変化時期
9. 各形状の関係性
10. 小結

1. 目的と分析方法

本章では、前章のアンケート調査結果を踏まえ、より実践的な設計業務という観点のもと、引き続きマンションの外装デザインを研究対象に、現存するマンションの実地調査によって外装デザインの現状・時代変化を明らかにしていく。なお、本章は各外装部におけるデザインの時系列グラフを分析の主としており、前章「5-2 マンションの時代性について」における設計者に対する意識調査との関連性が強い。

本章で特筆すべきは、前章であげたコスト・ディベロッパーの要望・消費者の嗜好・設計者自身のデザイン理念、また初歩的な必須事項として法的規制などの様々な要因から最終デザインが決定された後、結果的に市街地の景観を形成するに至る、最終的にアウトプットされたデザインの現状・時代的差異を解明していくことに主眼をおいている点である。つまり、本章の目的はデザイン変化の事由、デザイン採用要因、デザイン潮流のメカニズムなどを明らかにするための、いわば初段階として位置付けられる。これはマンション外装デザインの現状を把握するとともに、デザインがどのような要因を経て決定されていくのかを探っていく上で、また新たな景観改善策の模索する上での基礎調査研究として重要と思われる。

分析方法として、前述したように本章は前章「マンション外装デザインに関する意識調査」を主体とした研究成果を進めたもので、前章の分析方法を踏襲し外装デザインを「外装部を構成する主要素」である「玄関部」、「バルコニー部」、「屋根部」、「壁面部」、「色彩」に分け前章との相互リンクを図って、各外装部におけるデザイン変化を論究している。

なお、前章で区分した他の外装部に関して、「ワンポイント的装飾」については、それに相当する部分が本実地調査において不明確なため、「階段部」については前章の分析結果より設計者のデザイン行為の対象外として扱われていることがわかり分析内容から省いている。また「色彩」について、本章では特に明確な相違が判断でき景観形成上重要な位置を占める主要壁面に関するものの分析に限定するとともに、外装仕上げにおいて吹付を主とするマンションのほとんどが改修工事などにより竣工時の色彩を止めていなかったため、竣工時から変化が見られない外装タイルの色彩に関するものだけを対象とした。

2. 調査地概略及び選定理由

実地調査の対象地区は、福岡市の南区に位置し、昭和47年から15年にわたり土地区画整理事業地区として認定され開発が行われた「塩原地区」とした。「塩原地区」の面積は1,539,191平方メートルであり、福岡の都心である天神から南東に約4.5キロ、陸の玄関口である博多駅から南方約3キロに位置する。南、西は主要地方道の福岡大牟田線に、北と東は福岡随一の歓楽街中洲を通過して博多湾にのびる那珂川に囲まれた地域である。

この地区の発展は昭和47年に着手された「塩原地区区画整理事業」に収束され、昭和46年改定の第二次マスタープランで香椎地区・西新地区に並び副都心として開発が行われた。この区画整理事業の基本理念として、「副都心の建設は、都心部が九州の首都として急速な発展を遂げるにつれ、市民生活の遊離が進む中で、南部住民の生活に密着し、生活に根ざす諸処のニーズを満たす街づくりである・・・『塩原地区区画整理誌』（福岡市）」と述べている。この理念は現在でも息づき、他の二副都心（香椎・西新地区）に比べ、商業地区としてより住宅地区（都心天神におけるベッドタウン地区）としての特性が色濃く出ている。用途地域において「第一種、第二種住居地域」が大部分を占めることもその要因のひとつといえよう。

対象地「塩原地区」内は、急行停車駅である西鉄大牟田線大橋駅が中心部に位置し、交通の要としての役割を果たすとともに、天神からのびる主要地方道福岡筑紫野線が通り、それに国道385号線が交差するという主交通網があり、交通便利性に優れた地区である。南区の中心でもあり区内には南区役所、南体育館・南市民センターがある。地区住民に対しても利便性が図られており、総合病院である九州中央病院や数多くの文教施設（塩原小学校、玉川小学校、春吉中学校、宮竹中学校、筑紫丘高等学校など）が配されている。また、区内及び周辺には、九州芸術工科大学、東和大学、第一薬科大学、香蘭女子短期大学など数多くの大学が位置し学生街の性質も持つ。

以上から、選定理由をまとめると以下ようになる。

- 1) 福岡の都心から約4キロと近く、西鉄大牟田線の急行停車駅である大橋駅を中心にする中高層住宅の立地性を強く持つ地区であり、用途地域において「第一種、第二種住居地域」が大部分を占め中層住宅地区であり、研

究対象であるマンションが数多く存在すること。

- 2) 「市街地開発事業地区」に指定され、「市街地を形成する主たる建築物」を取り扱う本論に適していること。
- 3) 区画整理事業により新しい都市基盤（街路）が整備された地区であり特異な歴史性や地域性をもたないことから、デザインに地区独自の性質を持つ可能性が低く、いわゆる一般性の高い「匿名建築物」に着目した本論に妥当な対象であること。

3. 調査対象・方法

調査対象は、「塩原地区」内の全326件（2000年4月現在）のマンションであり、抽出調査では恣意的でサンプルの傾向が偏る恐れがあり本論の主旨にも見合わないため、全体として実態を明確に捉えることが可能な悉皆調査を行った。なお、塩原地区の概略地図及び対象のマンション物件を次頁に示した⁽⁴⁻¹⁾。

実地調査は、1998年10月、1999年4月、2000年4月に実施したもので各マンションに赴き、名称・所在地・階数・戸数・建設年代等の属性を調べ、外装デザインに関するデータとして写真撮影（一件当たり3～5枚程度）・記録・スケッチなどを行った。また建設年代が不明であったマンションが大半を占め、これらについては住宅地図¹⁾の出版年代を参考とした。

分析方法は、先に述べたようにマンションの外装デザインを形成する主要な四要素「玄関部」「バルコニー部」「屋根部」「壁面部（「色彩」を含む）」に関して、住宅地図の出現年代をもとに、各外装箇所のデザインの変遷を追っている。

さらに、前章と同様、アンケート調査で得られた結果をもとに、より明確な事務所の意識を把握するためヒヤリング調査を実施している。ヒヤリング調査は、社団法人福岡県建築士事務所協会の97年会員名簿に記載されている福岡市内の事務所を主とし、マンションを中心に設計業務に携わっている事務所を紹介等によって抽出し調査を行っており、30件程度の回答が得られた。調査方法は、事務所に赴き1時間程度の質疑応答の形式をとっている。調査内容は、本章に記載する各外装部の時系列グラフ等を用い、その要因などについて質問している。他に参考意見として、不動産業者、ディベロッパー業者に対しても数件ヒヤリング調査を実施している。

また、前述したように、ほとんどのマンションの建築年代は住宅地図への出現年代でしか調べることができず、住宅地図自体も89年以降定期的に出版されるものの、それ以前は不規則に出版されていた。そのため、本章の時系列グラフの各年代間隔には2年間から5年間までの開きがあり、年代毎の数値の規律性に乏しい。しかし、時代を通しての大局的な外装デザインの変化は捉えることが可能といえる。よって本章では、年代間の等価な数量的判断を極力避け、主眼を各外装箇所のデザイン動向に置いている。年代毎の件数・比率は右図を参照されたい。

なお、先に記したように本研究における「マンション」とは中高層耐火造集合住宅を指し、分譲形式に限らず賃貸形式も含んでいる。本調査の対象地である「塩原地区」では各マンションの賃貸・分譲の区分は判別し難いものもあり、その比率を記すことは避ける。但し、判別ができたマンションの中で約九割は賃貸形式であった。つまり、本調査は自ずから賃貸形式のマンションの外装デザインに関する結果に比重が置かれていることを最初に指摘しておく。前章の分析結果で、分譲形式のマンションは資産価値として売買されるため、ディベロッパー等の要望が強くなることが推測できた。本調査でも分譲マンションの方が比較的装飾性のない堅実なデザインが多い傾向にあった。その相違に関する言及は、憶測を抜けないため本論では取り扱わない。対象地区で賃貸形式マンションが大半を占めるとしても、本研究の対象である全マンションの外装デザインの一地区における現象・時代的差異を把握し、その要因を解明することに力点を置いて分析を行っている。

1) 参照した住宅地図を以下に記す。

『福岡市南区住宅案内図』東洋出版社発行、『全国統一地形図式航空写真航空住宅地図帳昭和53年版南区版』公共施設地図航空株式会社出版、『ゼンリン住宅地図 '83、'86、'89、'91、'93、'95 福岡市南区』株式会社ゼンリン



図-1 塩原地区の概略地図及び対象のマンション物件

4. 玄関部

実地調査から玄関部の形態は、建物本体と独立して門の形状をもつ「ゲート型」(写真-1)、玄関部上部に片持梁で庇を設けている「庇型」(写真-2)、庇の端部に柱を配し法規的にはピロティとして扱われる「ポーチ型」(写真-3)、それらに属さない「その他」、玄関部にデザインが施されていない「該当なし」にわけられる。それら形態の時代毎の増減を時系列グラフを用い分析する。

まず図を見て明らかなのは(図-2)、玄関部に独自のデザインが付加されていない「該当なし」が、80年代前半まで減少傾向ながら半数弱の高い値を示していたが、80年代中盤から「ゲート型」、「ポーチ型」に類する形態の普及に伴い、急速に減少していき、90年代以降は約1割に留まっていることである。

一方、上昇傾向にあるのが「ポーチ型」であり、80年代中盤から出現し始め、急速にポーチに類するデザインの普及がすすみ、「91～93年」には最大値52.9%と過半数を超え、その後減少するも約3割が「ポーチ型」に類するデザインを採用している。

また増減はあるものの(最大で「83～89年」の24.0%、最小で「89～91年」の9.5%)70年代から90年代にかけて一定の割合で採用されているのが「庇型」である。ヒヤリング調査の結果から、「庇型」の利点である設計上大きな面積を必要としない、比較的ローコストで抑えることが可能であるといった要因が庇型採用の一要因になっていることがわかった。但し、実地調査により概ね玄関形状が多様多様になっていくことがわかり、庇形状も装飾性の低いものから高いものへ移行してきているようである。

「ゲート型」に類する形態は、「ポーチ型」より幾分早く普及しはじめたが、「89～91年」の21.4%を境に下降しはじめ、近年ではほとんど見られなくなっている。ヒヤリング調査でこの原因を探ったところ、他の「ポーチ型」「庇型」がもつ雨天時における雨よけ等という用途に対し、「ゲート型」の用途がほぼ装飾性に限定したもので、「庇型」と「ゲート型」の性質を合わせ持った「ポーチ型」、またコスト問題・面積の関係により「庇型」が採用されやすいといった回答が得られた。この変化は同時に、設計者のマンション設計におけるデザインの円熟を意味し、玄関の用途として充足されない「ゲート型」は淘汰されていったと思われる。

また「その他」について、早い時期に見られる形状と

して玄関部に一定の空間を与えロビーとして活用できる形態があげられる。ヒヤリング調査において熟年層の設計者の回答では、初期の民間マンションはホテル設計に見習うことが多かったという。また、マンション自体まさに高級感を兼ね揃えており、現在ほど普及されていなかった。よってホテルにおけるロビーの形態をマンションに移行した結果生まれたデザインではなかろうか。近年で前述の三形態に該当しないデザインは、玄関回りの仕上げ材の変更(石吹き付けなど)の変更、玄関上部に帯状の装飾を配した形状により玄関の独立性を高めるデザインに限られる。その要因に関して、法的な面で面積に余裕がなかった、コスト上無理があった、設計者が自らの設計理念に基づいた形でデザインした等の理由によるとの意見がヒヤリング調査結果のこの現象に対する全般的見解であった。いずれにしろ玄関に装飾性を施して独立性を高めるという点で、初期と80年代中盤以降の玄関周りのデザインは大幅に異なっている。



写真-1 ゲート型



写真-2 庇型

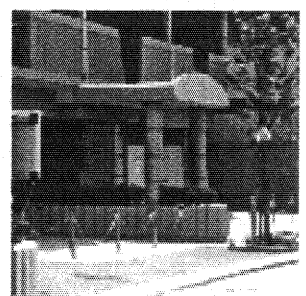


写真-3 ポーチ型

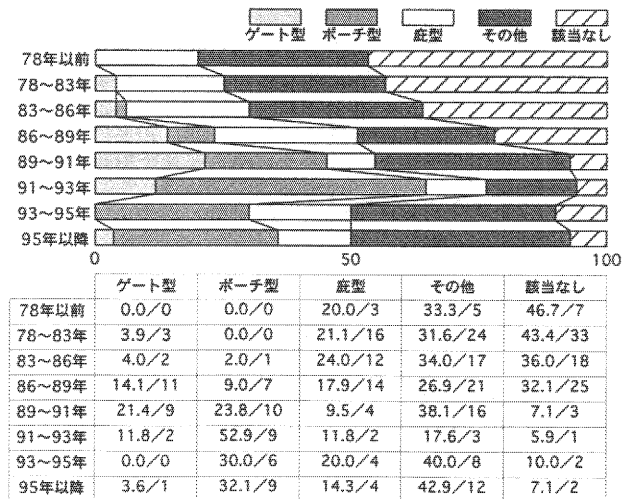


図-2 玄関部における各形状の時代変化

玄関の急激なデザイン変化は、まず「該当なし」が急速に減少していった、つまり玄関部に独自のデザインを付加価値として使用する手法が定着していった80年代中盤から後半にみられる。まず「ゲート型」が普及してきて、遅れる形で「ポーチ型」普及してきた。「庇型」は、時代の流れにより装飾性が高くなってきているが、年代を通して採用され易い形態であった。前章「4-2 ディベロッパー・消費者と外装デザインの関係」では最も両者の関心の高い外装部として「玄関部」があげられた。つまり、ディベロッパーと消費者の「玄関部」への関心が凡そ80年代中盤から急速に浸透してきたことが推し量れるであろう。80年代中盤とは日本経済の動向でいう所謂バブル全盛期にあたる。マンションも例外なくバブルの経済効果を受け、この時期に装飾性の高いデザインが生まれていった。それは「ポーチ型」が、ある程度の面積を必要とし、最終的には売却・貸借時の坪単価を上げるといったデメリットを持っているにも関わらず、デザイン手法として普及していったことなどからも窺える。

但し、バブル崩壊後の90年代に至っても、一度普及していった「ポーチ型」などは容易に衰退しない。むしろ玄関部における高級感等のデザインによる演出は、ヒヤリング調査の回答でも明らかであったように、ほぼデザイン上の必須事項になっている。つまり、前章「4-1

コスト問題と外装デザインの関係」において、玄関部はコスト削減にあっても、多少デザイン変更は見込まれるが、デザイン要素として残る外装部であるという結果が併用でき、本項の結果とともに立証するかたちとなった。しかし、バブル期以降コストを抑えなければならなくなったことは確実といえ、設計者の熟練によって余分な箇所に対するデザインの削除など創意工夫が行われているようである。

5. バルコニー部

現在日本のマンションにおいて、バルコニーの取り付けはほぼ必須条件になっている。今回の実地調査においても一部初期の古いマンションを除いて全てのマンションに配されていた。よって少なくとも我が国においてバルコニーはファサードを形成する主外装部のひとつといえる。

ここでは躯体形状²⁾を「直面型」「曲面型」「凹凸型」「手摺部のみ」に分類し時代変化を分析する。

さらに、バルコニー部を構成する主要素のひとつである手摺部（バルコニー部における躯体以外の箇所を金属などで作った柵状の部分を目指す）の形状の時代変化について、調査結果から確認できた「アルミ製縦格子」「鉄製縦格子」「メッシュ」「鋳物風装飾」「すりガラス」「不燃ボード」に区分して分析を行う。

また、躯体形状と手摺部によるバルコニー立ち上がり部の構成に関して、躯体のみで構成された「躯体型」、躯体と手摺の双方にて構成された「躯体+手摺型」、躯体部を有さず手摺部のみで構成された「手摺型」に分類し、時代によるバルコニーデザインの移り変わりを分析する。

なお、本調査実施中においてバルコニー立ち上がり面に対し、部分的に垂直方向にスリット状の切れ目を有したマンション、上・下部に水平方向に帯状のデザインを配したデザインが確認できた。よってこれらデザインの時代変化について分析・考察を試みている。

5-1 バルコニー躯体形状

まず躯体形状について調査結果より時系列グラフを作成した^(図-3)。バルコニー躯体表面に凹凸を設けない「直面型」が全期間を通して約半数を占め、時代にほぼ関係なくバルコニー躯体におけるデザインの主流になっていることがわかる。その要因として、「直面型」は最も簡略的な形状であり、凹凸などをつける形状に比べ表面積も少なくてすみ、型枠代・材料費の面でも経済的であることがあげられる。

概ね均一的なファサードを形成する「直面型」に対し、凹凸をつけファサードに変化をもたらす「凹凸型」は、70年代後半から80年代前半にデザイン手法として確立していったことがわかり、以降3割前後のマンショ

2) 「バルコニー躯体」について、「躯体」は「主として強度を受け持つ部分（建築大辞典第二版）」を指すが、本項ではやや強引であるが「手摺部」との区分を明確にするため、バルコニー床面に対し、立ち上がり部分で主としてコンクリートによって造られた部分を指す。

ンが凹凸を設けたバルコニー形状を採用している。

また調査結果より、凹凸部を直角ではなく斜めに突出させるデザイン手法が計32件見受けられたため、「凹凸型」を「凹凸型(直) (写真-4)」「凹凸型(斜) (写真-5)」に細分類し分析に加えた。80年代中盤以降は、「凹凸型(直)」が大多数を占めるが、それ以前は「凹凸型(斜)」のデザイン手法が多く使用されていたことがわかり(「83~86年」では18.0%と「凹凸型(直)」を大きく上回る結果となった)、バルコニー壁面に斜めを用いたデザインがバルコニー躯体形状を決定する上でのひとつの選択肢になっていたと思われる。

躯体にカーブを設けた「曲面型 (写真-6)」は、80年頃から緩やかに普及していき90年前後には「直立面型」と並んで主要なデザイン手法として用いられている。その後は減少傾向にあり、「曲面型」という手法が90年頃にひとつのピークを迎えていたと考えられる。「曲面型」の増減傾向の事由に関して、ヒヤリング調査の結果では、

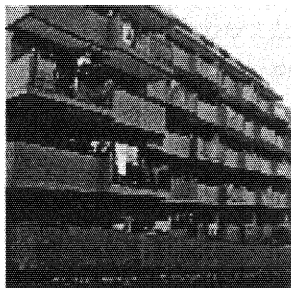


写真-4 凹凸型(直)

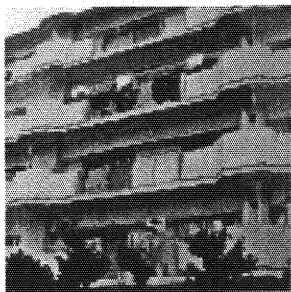


写真-5 凹凸型(斜)

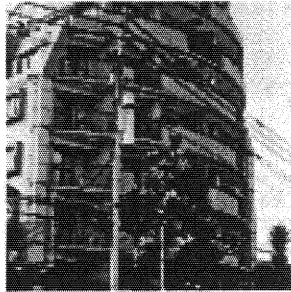


写真-6 曲面型

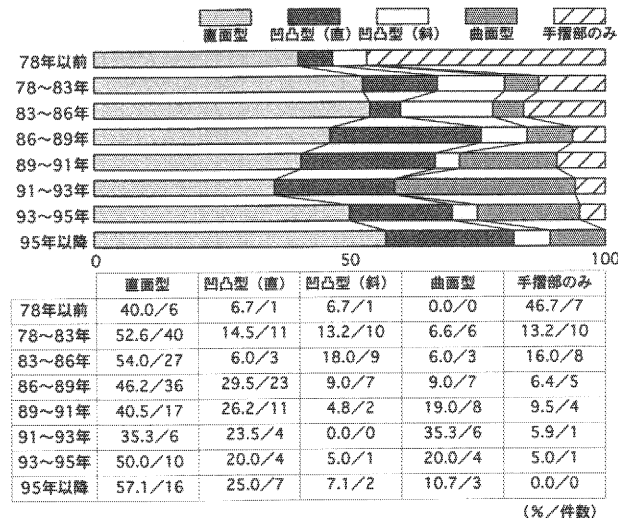


図-3 バルコニー躯体における各形状の時代変化

具体的なコストの試算は不可能であったが、型枠代が特注であるケースが多くコスト増が見込まれることがわかり、曲面を配したデザインは装飾としての効果が強いため、バブル期以降は経済的な問題より採用され難くなったのではなかろうか。

一般的な躯体形状の留意点として、特に設計時における「直立面型」と「凹凸型」の両者の採用要因は、採光斜線、窓先空地の確保など法的な制約に躯体のデザインが左右されるケースが多い。さらに、洗濯物干しスペースの確保・クーラーなどの屋外機設置場所・避難方法、場合によっては椅子などをおけるスペース作りやガーデニングスペースなど、バルコニー内の使用用途などによっても躯体形状は変化を見せる。但し「凹凸型(斜)」や「曲面型」など装飾性の高いデザインが時代によって採用されていることも事実であり、一概に建築法規や使用用途に追従する形でデザインは決定されていないようである。ヒヤリング調査でも、躯体に対する選択の自由度が少ないことが設計者の回答で多数得られたが、ファサードが均一で平坦になりがちであり、バルコニーに凹凸をつけることでファサードに変化をつける効果として積極的に用いるという回答も得られた。

5-2 バルコニー手摺部

次にバルコニーの立ち上がりにおいて、躯体以外の箇所を金属などの素材で柵状に覆った部分、つまり手摺部に関する時代変化について分析する。

時系列グラフをみて明らかなのは(図-4)、70年代中盤頃まで「鉄製縦格子」が大半であったことである。70年代後半より、素材が変化した形で「アルミ製縦格子 (写真-7)」が替わり主流となっている。以降、80年代中盤から出現してきた「鋳物風装飾 (写真-8) (鋳物を実際に使用しているケースは本調査では確認できず、鉄製1件、他はアルミ製であった)」が90年前後には「アルミ製縦格子」を抜き、現在もっとも一般的な手摺部になっている。つまり、手摺形状は概ね「鉄製縦格子」から「アルミ製縦格子」、そして「鋳物風装飾」という順序でバルコニー手摺部の主流が移行している。「鉄製縦格子」から「アルミ製縦格子」の移行は、ヒヤリング調査も加味した上で推し量ると、材の防錆や軽量化などといった作業上、維持管理上のメリットを踏まえた素材の向上が起因しているようである。但し「鋳物風装飾」への移行は、前者のような素材の違いがなく、機能的なメリット

は透視性の粗密でいうとややプライバシー確保という観点で有利であることを除き皆無である。前章やヒヤリング調査より、ディベロッパー・消費者の漠然とした「高級感」などの要求が結果として「鋳物風装飾」として具現化され、採用されやすくなった要因としてあげられる。

他に、「鋳物風装飾」には劣るものの同時期に出現して一定の割合で使用されている「メッシュ（パンチングメタルも含む）」、少数ながら年代を通して使用されている「すりガラス」も含めて、「鋳物風装飾」と同様に高級感などといった意匠的効果を狙うことの他に、居住者のプライバシー確保という要望に対応し、透視性の高い鉄製・アルミ製縦格子等を避けることが採用要因になっていることが、ヒヤリング調査によっても明らかになった。しかし室内への通風の面を考えると、すりガラスなどの素材より鋳物風装飾が優れており、これが少数に留まる要因として考えられる。またヒヤリング調査におい

て格子形状を避ける傾向に対し、外見的に見劣りするなど多数回答の他に、マンションの高層部では透視性の高い素材は生活者に恐怖感を与える、安全面で問題があるなどといった回答も得られた。

5-3 躯体形状と手摺部の構成

以上、バルコニー立ち上がり部の躯体形状と手摺部の時代変化について分析を行ったが、本項ではそれらのバルコニーを構成する上での相互の関係性の時代変化を示す。

分析結果より^(四-5)、躯体のみで手摺部を有さない「躯体型」は、約2～4割の間で年代を通して一定の割合で採用されている。

一方、手摺部のみでバルコニーを構成した「手摺型」は「78年以前」は約半数（46.7%）が該当していたが70年代後半から急激に減少していき、80年代以降極めて少数のマンションが採用するにすぎない。「躯体+手摺型」は「手摺型」の急激な減少に伴った形で増加し、以降概ね時代的変動は見られない。

ここでバルコニー立ち上がり部の時代変化に関して、まず実地調査や前項「5-2 バルコニー手摺部」で、単調でバルコニー立ち上がり部全体に対し占める割合が比較的高かった鉄製・アルミ製縦格子から、主に躯体主体でスリット状に切り欠いた部分に用いられやすい「鋳物風装飾」「メッシュ」などに手摺部が移行していったことが確認できた。よって、全般的にバルコニーの躯体と手摺の構成は、手摺主体から躯体主体へ移り変わっているといえる。このデザイン変化の要因として、前項と同様に高級感、マンション生活者のプライベート確保などディベロッパー・消費者からの要望に対応したこと、構

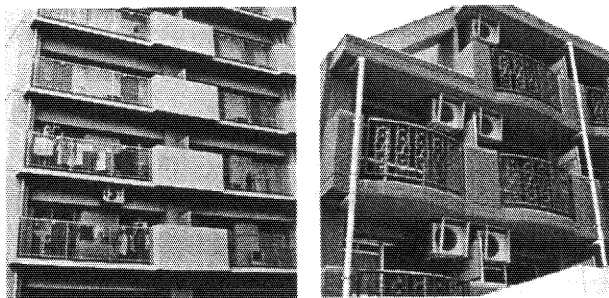


写真-7 アルミ製縦格子

写真-8 鋳物風装飾

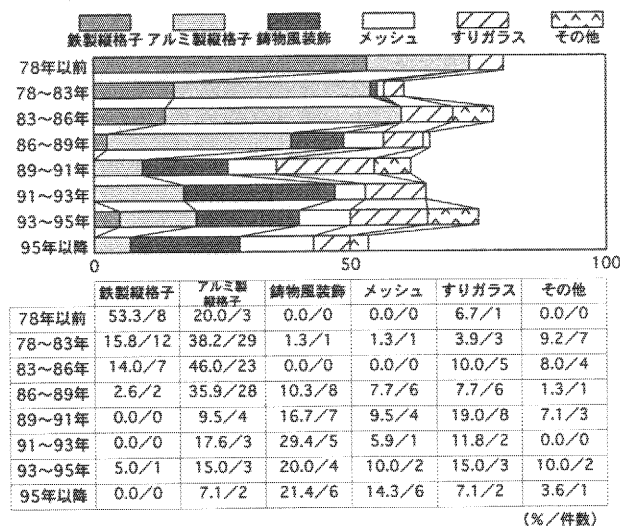


図-4 バルコニー手摺部における各形状の時代変化

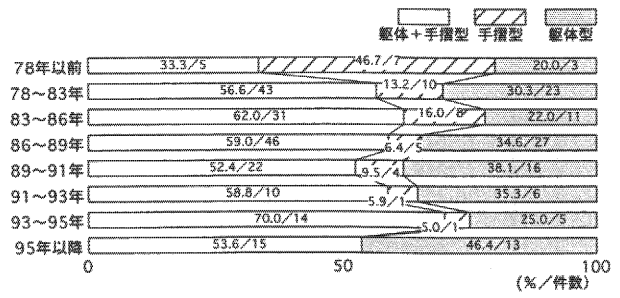


図-5 バルコニーにおける躯体形状と手摺部の構成

3) 前項「5-2 バルコニー手摺部」及び上記の要因に関連して、他に各手摺形状におけるコストについて、具体的な数値を算出することは実際の単価と売値が違うなど不明確な点も多く避けたが、『建設物価』、『建築コスト情報』（財団法人建設物価調査会発行）などの参考資料を踏まえ、設計者の助言（実践的な価格の認識を得るため）をもとに考察を試みている。例えば、手摺部をアルミ製縦格子にした場合（平米単価、工事費含む）とコンクリート躯体を用いた場合（0.15立米として換算、外側タイル張り・内側吹付、工事費含む）では、およそコンクリートを用いた場合の方が1.5～2倍程度のコスト増が見込まれるなど。

造技術が進歩したこと、などがあげられる³⁾。また、プライバシー確保に相反するが室内空間の解放性といった点も設計上重点項目のひとつであり、双方に解答を示すことができる「鑄物風装飾」などを採用した「躯体+手摺型」が主流になっている要因として考えられる。

なお、近年のマンションにおける構法的な変化も関係し、従来屋外とバルコニーをつなぐ開口部上部に配されていた梁をバルコニー立ち上がり部に配す、設計者の中で通称「逆梁」と呼ばれる手法が普及してきている。「逆梁」は、開口部を広くとれることにより居住者に解放感を提供、やや採光面で有利となる可能性があり、また梁の移動に伴い主柱も屋外に位置するため、屋内空間の角部における柱の余分な突出を排除でき、室内を有効利用できる点で優れた手法といえる。この手法の採用は自ずから「躯体型」の採用を意味し、従来薄手のコンクリートを配す躯体形成手法からの時代的な移り変わりを思わせる。

5-4 スリット形状・帯形状

前述したように、ここでは本調査実施中においてバルコニー立ち上がり面に対し、部分的に垂直方向にスリット状の切れ目を有した例、上・下部に水平方向に帯状の吹き付けを配したデザインが確認できた。よってこれらデザインの時代変化について分析・考察を試みる。

まず、主に「躯体型」におけるバルコニー立ち上がりの端部、もしくは適宜スリットを配している物件について普及時期、また出現要因について言及する。

グラフの結果をみてもわかるように⁽⁴⁻⁶⁾ 90年代から本格的に採用されて今日に至っている。ヒヤリング調査の結果も踏まえると、出現要因は、まずバルコニー部におけるクラック防止策の一貫として有効に働くことがあげられる。また端部のスリットに関して、普及していった時期もバブル期崩壊後と重なり、タイル役物を排除することによりコスト低減を図れることが重要な要因のひ

とつといえる。躯体に適宜配される場合については、「躯体型」におけるスリットはやや通風に有利であり、室内環境の改善策のひとつとして、また洗濯物の乾きやすさの点も考慮している場合がある。なお、様々な面で有効に働くスリット形状であるが、前述の「逆梁」ではバルコニー立ち上がり部は梁の通り道として採用不可能であり、結果「逆梁」のデメリットとして、やや通風、また室内の解放性に難があることがあげられる。

バルコニー立ち上がり部の上・下部に水平方向に帯状のデザインを配したデザインは、下図のグラフ⁽⁴⁻⁷⁾により、90年前後から一般的に普及している。帯部の仕上げ材はほぼ全件吹き付けであり、一部比較的古いマンションにおいてタイルを使用して帯部のタイルの色を変える手法を採用しており、このケースでは装飾的要素が大きい。しかし、一般的に吹き付けを採用していることから、この形状に関しても、前述同様バブル期以降スリット形状にやや遅れる形で普及しており、コストを抑えるためタイル総数を下げると伴にバルコニー隅部のタイル役物を省くということが出現の主要因としてあげられる。構法面でも、バルコニー上部の帯状吹き付けは有効に働き、タイルと躯体の間に雨などの浸透によって将来的にタイルが落下する恐れがある等の問題を設計時のデザイン決定上で未然に防ぐといったメリットを持っている。

以上のデザインは、装飾性にのみならずコスト面・設備・構造面などの有利性を加味したデザインとして好例である。それは装飾性にも結びつき、例えば後者の帯状のデザインはマンションにおけるポストモダン様式の浸透を考えると、コーニス(胴蛇腹)に見立てられているともいえる。ヒヤリング調査の結果でも、「コスト削減を逆にデザインに活かす」といった回答が得られ、特にバブル期以降、設計者のマンション設計における熟練、創意工夫が垣間見れる。

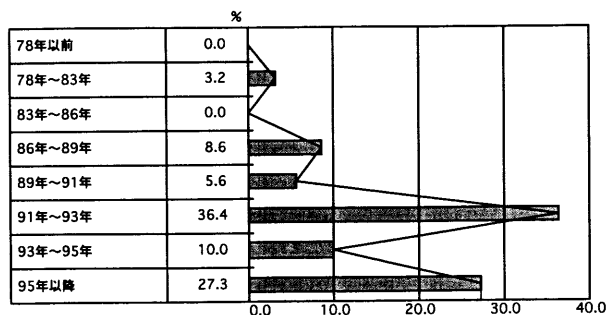


図-6 スリット形状を施したバルコニーの時代変化

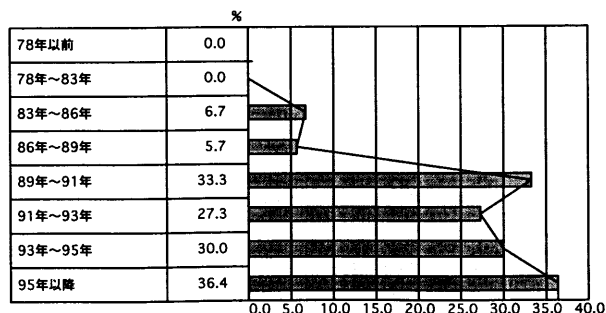


図-7 帯状吹き付けを施したバルコニーの時代変化

6. 屋根部

マンションの屋根形状は、大まかに「陸屋根」、「傾斜屋根 (写真-9)」、「アーチ型屋根 (写真-10)」に分けられたが、調査結果より「陸屋根」に分類されるものの屋根縁部斜めにカットした特殊な形状を屋根デザインとして用いた物件が全件中59件と多数あったため、独立して「傾斜パラペット (写真-11, 12)」と称し一つの 카테고리として扱い、これを含む以上4形状について時代変化を探った。なお、「傾斜パラペット」デザインの採用に関して、法的規制によるもの、つまり斜線制限などの規制によりパラペット部を斜めにカットしていると推測できる物件は含めていない。

調査結果 (図-8) から概して、最も装飾的效果が希薄で一般性が高いといえる「陸屋根」及び体系的にそれに含まれる「傾斜パラペット」、つまりフラット形状の屋根のみの手法から、「傾斜屋根」「アーチ型屋根」の浸透といったマンション屋根形状の時代変化がわかる。

「傾斜屋根」、件数は減るものの「アーチ型屋根」といった、それ以前のフラット形状の屋根に付加価値として施されるデザイン手法は、80年代中盤以前までは寧ろ例外的に採用されていたが、80年代中盤から急激に件数をのぼし、90年代頃からは約半数の物件が屋根形状のデザインとして傾斜・アーチ型を採用しており、マンションの屋根形状決定の際の選択肢の一つとして設計者に定着しているようである。

「陸屋根 (傾斜パラペットを含む)」は80年代中盤以降の傾斜・アーチ型屋根の浸透に伴い減少しているが、依然として半数以上のマンションで採用されている。ヒヤリング調査でこの動向に関する質問をしたところ、屋根に傾斜をつける必然性を感じないこと、フラット形状がコスト上最も効率的な手法であることが多数の回答として得られた。但し、近年の陸屋根形状に見られる傾向として、切妻方向のファサードのみに張り子の要領で傾斜屋根を模したボリュームを付加するケース、壁面最上部に帯形状、所謂コーニス形状を配するケースなどがあり、一概に簡素なデザインとして継続していない。この調査結果は、玄関部における「庇型」のデザイン変化と類似する。

前述した「傾斜パラペット」は80年代中盤まで3割程度のマンションに見られ、ひとつのデザイン手法とし

て当時確立していた。施工上の有利性、住環境改善などに起因したデザインとは考えがたく、立面図の際の見栄え、またデザイン上の流行りが出現要因として推測できる。80年代中盤以降「傾斜パラペット」は「傾斜屋根」などの普及に伴って徐々に減少傾向にあり、「陸屋根」は移行期 (80年代中盤) の以後も年代を通してほぼ一定の割合の値を示していることから、結果的に縁部のみならず全体の形状を変化させる「傾斜屋根」「アーチ型屋根」に手法が切り替わっていったことが考えられる。

なお、「傾斜屋根」の浸透要因において、雨天時等の雨水処理の面で有利であるという可能性もあるが、近年の施工技術において陸屋根とさほど関係しないことが、設計者に対するヒヤリング調査などによって明らかになった⁴⁾。つまり、一般的に設計時の屋根形状の如何は装飾的效果の一つとして選択される場合が多

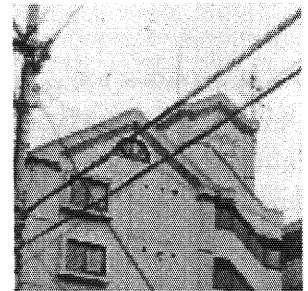


写真-9 傾斜屋根

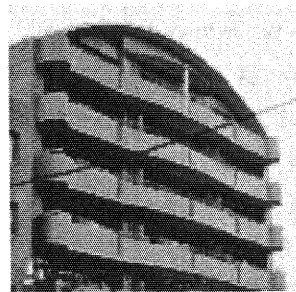


写真-10 アーチ型屋根

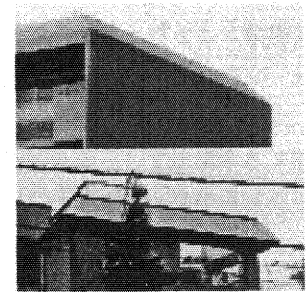


写真-11,12 傾斜パラペット

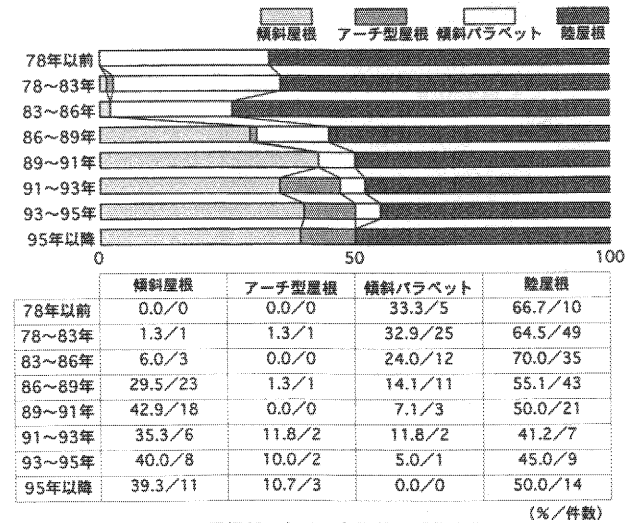


図-8 屋根部における各形状の時代変化

4) 他に外観デザインでは目立たない箇所、屋根表面における施工上での防水処理等のグレードの差異がある。ヒヤリング調査によると、設計者のデザインに対する基本理念によっても異なるが、コスト削減によって簡略化、低コストの防水処理対策を講じるなど回答が得られた。

い。さらに、前章「4-2 ディベロッパー・消費者と外装デザインの関係」において屋根部はディベロッパー・消費者の要望が比較的少ない箇所であり、「4-1 コスト問題と外装デザインの関係」では、コスト削減にあっては玄関部などに比べると軽視されやすい箇所であるとの分析結果が得られた。このことから、屋根形状の選択は地場事務所における設計者自身のデザインに対する基本理念に沿って抽出される場合が多く、またコスト如何によってはコスト増が見込まれる傾斜屋根などという付加要素を省いているという可能性がある。

7. 壁面部

壁面部はマンション外装の全体を形成し、バルコニーデザインとともに最も外観を左右する箇所といえる。特に近年では壁面の外装仕上げが以前の吹付主体からタイルを使用するケースに移行していったことは、マンション設計における大きな時代変化のひとつである⁵⁾。

よって、本項では壁面を構成する上で主要になるタイル及びその色彩に関して、それらの時代変化と相互の関連性について分析する。なお、タイル目地の時代変化、調査中確認できた壁面コーナーに独自のデザインを配したコーナー強調タイプについても分析を行った。

7-1 タイル使用面積

まず全壁面の仕上げに関して、タイルのみを使用している「全面タイル型」、局部的に吹付を用いる「部分タイル型」、主要街路に面する壁面のみにタイルを用いる「ファサードタイル型」、ワンポイント的な装飾としてタイルを活用する「部分タイル型」、吹付のみでタイルを使用していない「吹付型」に分類して、タイル使用の定着過程など時代変化を分析する。

分析結果より^(図-9)、タイルを外装仕上げとして使用していない「吹付型」は、80年以前は主流であったが、以降減少していき80年代中盤では該当件数は1割に満たない。タイルを一部分に装飾的效果として使用する「部分タイル型」も同時期に減少しており、外装仕上げの主体を吹付とした物件は80年代より概ね減少傾向にある。

一方、外装仕上げの大部分をタイルとした「全面タイ

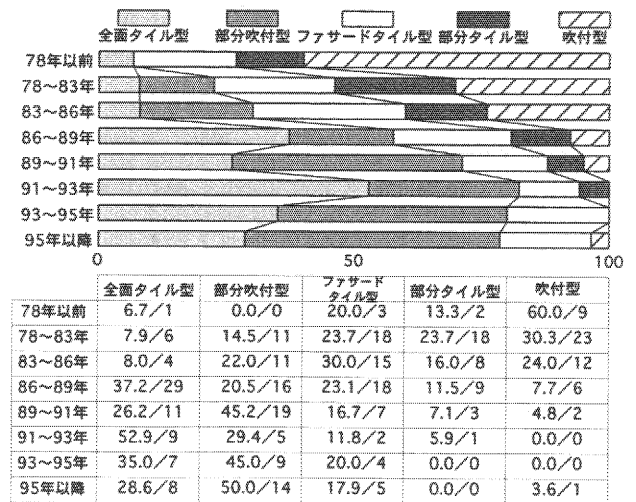


図-9 タイル使用面積の時代変化

(%/件数)

5) タイル使用の一般化の一方で、近年マンション建設後にタイル落下による被害などが取りだたされている。平成6年のPL (Product Liability) 法の制定にも伴って前述の施工上の問題、及びバブル崩壊後の経済危機などの要因が相まって、現在いわゆる公団マンションでは外装仕上げに関し吹付が標準化しているようである。この背景には、汚れにくいなど吹付の技術向上も考えられる。

ル型」「部分吹付型」は、同時期である80年代中盤以降に急増し、90年代には約8割のマンションがこれらに該当している。特に80年代中盤から90年代初頭に多く採用されたのが「全面タイル型」であり、「部分吹付型」との割合を比較してもその急速な増加がわかる。

以上の結果は、吹付とタイルを対極として「吹付からタイル」という時代変化の構図が成り立つ。吹付からタイルへの仕上げ材移行の要因のひとつとして、維持管理の面からタイルの方がランニングコストを抑えることができる点があげられる。他にも、建築施工などの技術進歩が考えられ、例えば10～20枚程度のタイルを一組とし、裏面にシートを配して壁面に貼り付けるユニットタイル（シートタイル）の手法が定着してきたことにより、工期短縮、すなわちコスト削減につながるなどがタイルの使用増加の理由として考えられる⁶⁾。またヒヤリング調査より、「関連消費者の一般的価値観から高級感・西洋的雰囲気を出し出すことができる」など、装飾的な要素にも関わるようである。但し、「全面タイル型」は90年頃から安定しはじめ、90年代前後に「全面タイル型」にやや遅れをとる形で「部分吹付型」が増加し、以降4～5割程度のマンションがこれを採用しており、「全面タイル型」を抑え最も一般的な手法になっている。

よって、「部分タイルから全面タイル」という時代変遷の構図は成立しえない。それは、近年では「全面タイル型」より「部分吹付型」のマンションが多数見られること、「ファサードタイル型」が年代を通して、ほぼ一定の割合で採用されていることから窺える。この現象は、ヒヤリング調査においてほぼ全件の事務所の回答として得られた、近年コスト削減案の最有力候補のひとつとしてタイル枚数の減少、タイル役物の不使用がある、といった結果が作用していると思われる。バルコニー奥の壁面のタイル不使用、後述する壁面角部に役物のタイルを使用せず、吹付仕上げにすることでタイル総数を下げる手法もコスト問題に伴った結果出現したデザイン手法といえる。この背景には、やはり社会経済の浮き沈みが強く関連すると思われる。

なお、前述したようにタイル使用に伴って、タイル目地も時代によって変化している。グラフで示すように(図-10)、破れ目地（馬乗り目地）から通し目地（芋目地）への移り変わりが明確に現れた。移行期にあたるのが80年代後半であり、以前破れ目地で形成されていた外装タイルが通し目地に変化した。従来、建築現場でタイル業者（場合により左官）がタイルを貼る際、通し目地の場合には目地直線に微妙なズレが生じるため破れ目地を採用していたが、前述の一般に通し目地であるユニットタイル（シートタイル）の普及により結果的に通し目地が採用されるようになったと思われる⁷⁾。

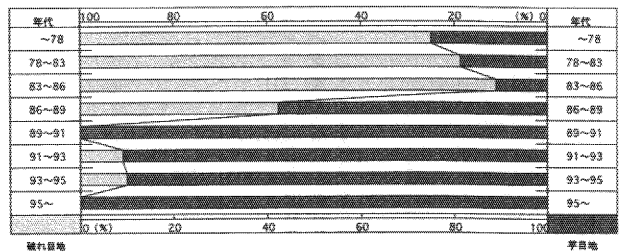


図-10 タイル目地の時代変化

7-2 タイル色彩

次に使用タイルの色彩について大まかに「濃茶系色」「薄茶系色」「白色」「グレー系色」「その他」に分類できたため、それらの時代変化について分析する。

現存するマンションで最も多く見られるタイル色彩が全物件中99件該当する「薄茶系色」であり、近年では約7割がベージュ系、通称「アースカラー」といわれる色味⁸⁾をタイルカラーとして採用している。

「薄茶系色」が台頭する90年以前に主として採用されていたのが「濃茶系色」であり80年代前半まで5割程度のマンションがこれに該当し、使用頻度の高い色彩であった。以降は減少し、90年代にはほとんど使用されなくなっている。近年上昇傾向にあるが該当件数は依然として少数である。

また「白色」は、「濃茶系色」から「薄茶系色」に色彩の主流が移行していく過程において増加していき、80年代後半には茶系色について約3割のマンションが採用している。90年代にはいり減少し近年では殆ど見られないが「白色」使用のひとつのピーク期があったことは明

6) これらに関して、ヒヤリング調査の結果を参考にし、大手建材メーカー数社のタイルカタログを資料として参照している。

7) タイルカタログなどを参照した結果、一般に通し目地のユニットタイルが多いが、破れ目地のユニットタイルも一部見られる。但し、単価・工費などやや破れ目地の方が高価と思われる。

8) ここで「薄茶系色」とはベージュ系色を指し、ヒヤリング調査で明らかになった、主に近年設計者に通称「アースカラー」と呼ばれる色彩を指す。

らからである。「白色」の減少に伴い90年頃に出現してきたのが「グレー系色」であり、比較的少数ながら90年代以降約2割程度のマンションが該当し、近年タイル色彩の一選択肢として確立しているようである。

全般的な外装デザインにおけるタイル色彩について、「濃茶系色」から「薄茶系色」への主流の移り変わり、その移行期に大きな分流をつくった「白色」、「白色」と入れ替わる形で現れた「グレー系色」、といった大まかな時代変化の構図がある。前章「4-1 コスト問題と外装デザインの関係」において、コスト問題と色彩はほとんど関連性がないことがわかった。よって、以上の色彩の時代的差異は、設計者を含んだマンション設計全体におけるデザイン潮流と考えられる。ヒヤリング調査でも、マンションの色彩を見ると「建設年代がよくわかる。」など得られ、この回答を立証する分析結果となった。なお、「白色」の衰退原因について、ヒヤリング調査で汚れなどが目立つといった維持管理面で不利になるという回答が得られた。これは、タイル材質の向上によって汚れにくいタイルが普及されれば、潮流の関係から「白色」タイルを使用したマンションが将来的に再度増加する可能性があることを意味している。

た。しかし「部分タイル型」に限り0.4%と全組み合わせの中でも最も低く、「薄茶系色」が「部分タイル型」では用いられがたいことがわかる。一方で「部分タイル型」に該当するマンションの殆どが「濃茶系色」といえる。また「部分吹付型」の該当件数が全体の32.0%と最も多いにも関わらず、「白色」タイルが採用されたマンションは「全面タイル型」であるケースが多い。

前項のタイル使用面積とタイル色彩の時系列グラフも踏まえると、「濃茶系色」で「部分タイル型」から「白色」で「全面タイル型」、「薄茶系色」で「部分吹付型」というマンション外装のタイルの変遷が見られる。

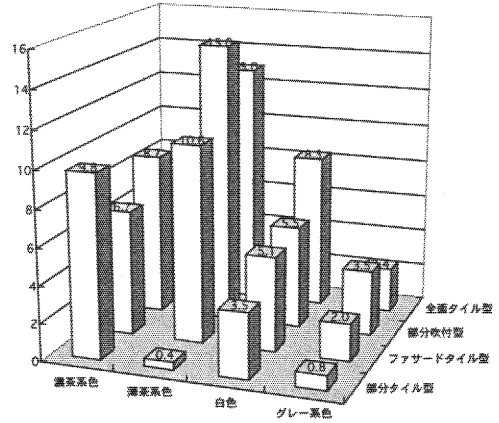


図-12 タイル面積とタイル色彩の関係性

7-4 コーナー強調タイプ

前述したように、壁面の角部をタイルではなく吹付などで仕上げ、垂直方向に帯をつけたタイプが調査で確認され、その普及時期及び出現要因の考察を行う(図-13)。

グラフより90年頃から急激に普及してきた手法であることがわかり、現在に至るまで約2割の物件で採用されている。出現時期及び手法の類似性から、「5. バルコニー一部」で述べた帯形状と同様に、コスト削減によって出現し結果的に装飾技法として確立しているデザインといえる。特に吹付部に水平方向の目地を適宜配し、上部に雁行を設けるなどジャイアントオーダーを模してた

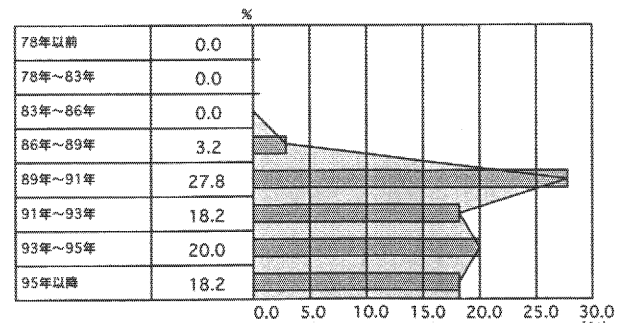


図-13 コーナー強調タイプの時代変化

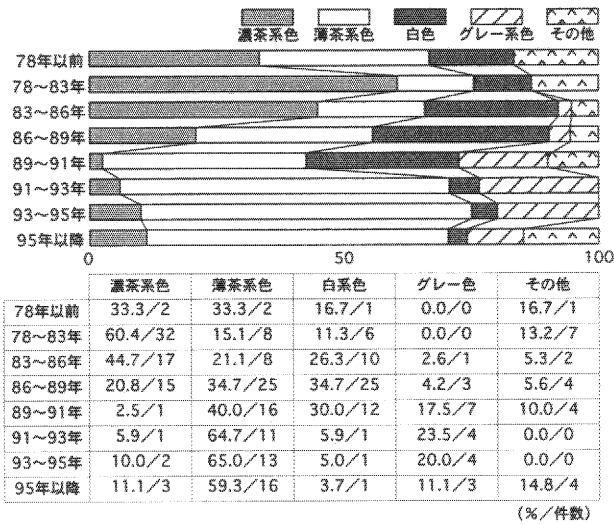


図-11 タイル色彩の時代変化

7-3 タイル使用面積とタイル色彩の関係性

以上、これらタイル面積とタイル色彩の関係性を、両者の形状を組み合わせたクロス集計グラフ(図-12)を用いて考察する。「吹付型」を除く276件中最も多く得られた組み合わせが「薄茶系色」×「部分吹付型」であり、全般的に薄茶系色に該当するマンションが多数存在することから、「薄茶系色」との組み合わせが高確率を示し

形で装飾性を強調しており、そのデザイン性質からポストモダン様式に相当するものと思われ、前章でもあげたポストモダン様式の浸透箇所を垣間見ることができる。

8. 外装デザインの変化時期

以上各外装部におけるデザインの時代変化を総括して一様に着目できる点は、一連の変化が80年代、特に中盤頃に多く見られることである。もちろん、先にも述べたように年代区分を一律にすることが不可能であったため、年代間で等価に判断することは難しいが、少なくとも80年代中盤から後半にかけマンション外装におけるデザイン手法が大きな変革期を迎えたといえる。

それは屋根部における「傾斜屋根」を採用する物件の急激な増加や、外壁タイルにおける「全面タイル型」の急増に代表される。それらにやや遅れをとる形ではあるが、玄関部における「ポーチ型」、バルコニー躯体形状における「曲面型」や屋根部の「アーチ型屋根」といったデザインに曲線を用いた形状なども80年代後半に増加していったデザイン手法である。

一方で「凹凸型(斜)」や「傾斜パラペット」といった斜線を活用したデザイン手法は、80年代中盤を境に減少していった比較的簡素なデザイン手法である。

以上を考慮しても、この時期に外装デザイン全体が急激な変化を遂げていることは明白である。先の分析結果でも示したように、バブル期に相当する時期にポストモダン様式をはじめとした多種のデザインがマンションに浸透しており、日本経済がマンション設計に及ぼす影響力が強いことを示唆している。詳しくは本章末の「10.

小結」に譲るが、バブル崩壊後のデザイン変化が興味深く、設計コストの低下によるタイル数の減少など余分なデザインを排除する試みが見られ、マンションデザインが円熟期にはいつているようである。

9. 各形状の関連性

前項までで、各外装箇所の形態・形状等の時代変化の推移を明らかにしてきた。本項では、時系列グラフによって得られた結果を踏まえ、それらの各外装部の相互の関係性について各外装形状のクロス集計により分析する⁹⁾。

集計した結果^(図-14)、すべてのパターンを網羅した図-9が得られた。以下でそれぞれの組につき概説する。

・組み合わせ<A>(玄関形状×バルコニー躯体形状)
「該当なし」、つまり玄関部に独自のデザインを施していないものと「直面型」の組み合わせが最も多いが、新しく普及してきた「曲面型」が採用された場合「ポーチ型」であるケースが多いこと、「凹凸型(斜)」や「手摺部のみ」は「庇型」か「該当なし」と併用されやすいことがわかる。

・組み合わせ(玄関形状×バルコニー手摺部)
「アルミ製縦格子」と「該当なし」、もしくは「庇型」の組み合わせが多数で、続いて「鉄製縦格子」×「該当なし」であり、比較的単純なデザインのもの同士の組み合わせが多く、他は少数でほぼ一定である。しかし、玄関形状が「ポーチ型」の場合は、「鋳物風装飾」が採用されやすい傾向にあるといえる。

・組み合わせ<C>(玄関形状×屋根形状)
屋根形状が「傾斜パラペット」の場合、玄関は「庇型」「該当なし」に限定され、「傾斜屋根」の場合には各玄関形状はほぼ一定量でありどのような形状も考えられる。全般的に先に述べた図-5においても数多く見られた「陸屋根」との組み合わせが多く「陸屋根」×「該当なし」が最大値を示した。

・組み合わせ<D>(玄関形状×タイル使用面積)
タイル使用面積の少ない「部分タイル型」または使用しない「吹付型」では、玄関形状が「該当なし」か「庇型」に限られている。言い換えると玄関形状が「ゲート型」「ポーチ型」の場合、タイル使用面積は「ファサードタイル型」以上である可能性が高く、特に「ポーチ型」×「部分吹付型」が多い該当件数を得た。

・組み合わせ<E>(玄関形状×タイル色彩)
タイル色彩が「濃茶系色」では玄関形状が「庇型」「該当なし」に、「グレー系色」の場合は「ポーチ型」にほぼ限定される。一方、玄関形状が「ゲート型」の場合では、色彩は「薄茶系色」「白色」であるケースが多い。

9) クロス集計後、多変量解析数量化3類を用いた分析を試みたが、十分な寄与率が得られず、本稿では取り扱わない。

全般的に前述した両者の時系列グラフによる時代変化に準じる結果となった。

・組み合わせ<F> (バルコニー躯体形状×屋根形状)

両者の最も基本的な形状といえる「直面型」と「陸屋根」の組み合わせが突出しており、その採用頻度の高さを示している。また、「凹凸型(斜)」や「手摺部のみ」といった古いデザイン手法はほぼ「陸屋根」「傾斜パラペット」の場合においてしか見られなかった。

・組み合わせ<G> (バルコニー躯体形状×タイル使用面積)

バルコニーの躯体形状が「直面型」との組み合わせが主流であるが、他に「凹凸型(直)」である場合、タイル面積はタイルを外装仕上げの主とした「ファサードタイプ」「部分吹付型」「全面タイル型」である可能性が高く、特に「部分吹付型」との組み合わせが高い値を示した。また、壁面仕上げが「吹付型」である場合にバルコニー躯体形状は「直面型」、「手摺部のみ」に限定されやすい。

・組み合わせ<H> (バルコニー躯体形状×タイル色彩)

ここでも全般的に「直面型」との組み合わせが高い値を示したが、「薄茶系色」の場合においては、「凹凸型(直)」であるケースも多い。また、「曲面型」を採用したマンションはタイル色彩は「薄茶系色」である場合が多い。

・組み合わせ<I> (バルコニー手摺部×屋根形状)

屋根形状で最も基本的な形状といえる「陸屋根」に値が集中しており、特に「陸屋根」×「アルミ製縦格子」が全体の約4分の1を占め突出している。次に該当件数が多かった「傾斜屋根」では、「鋳物風装飾」との組み合わせが最も多く「鉄製縦格子」「不燃ボード」との組み合わせは殆ど見られない。また屋根形状が「傾斜パラペット」の場合、手摺部は「鉄製・アルミ製縦格子」に限定される。

・組み合わせ<J> (バルコニー手摺部×タイル使用面積)

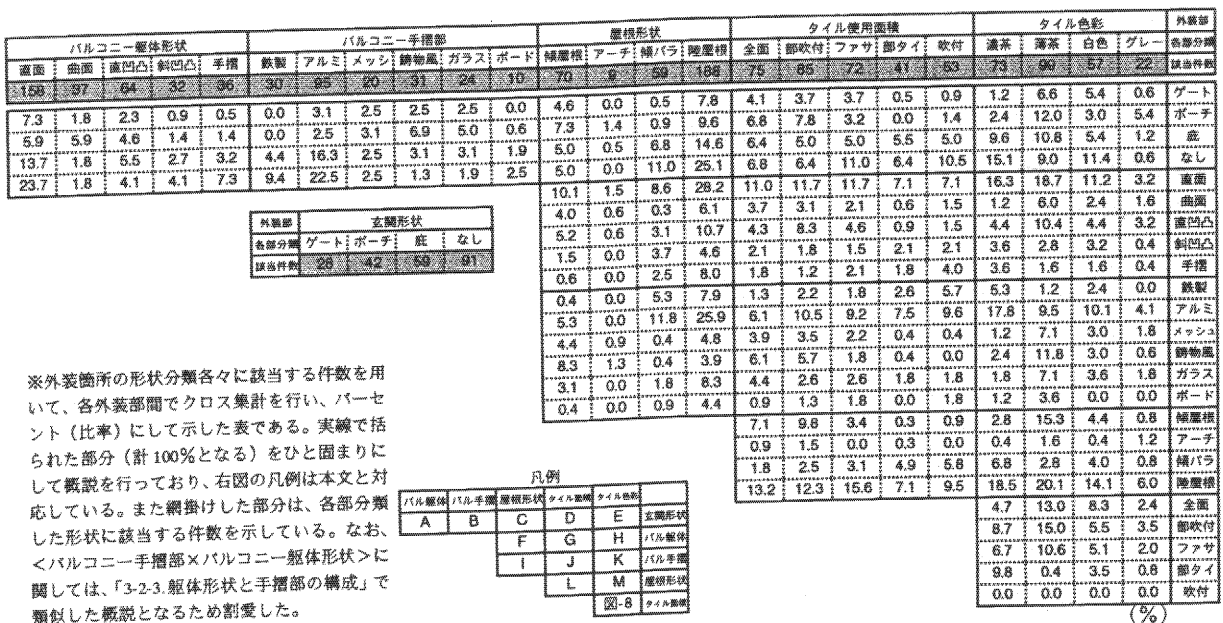
「アルミ製縦格子」、値は減るものの「不燃ボード」はタイル面積に限らず使用されていることがわかる。またタイル面積が大きくなるほど増加していくものとして「鋳物風装飾」「メッシュ」「すりガラス」が上げられ、一方タイル面積が小さくなるほど増加するものとして「鉄製縦格子」が上げられる。

・組み合わせ<K> (バルコニー手摺部×タイル色彩)

全般的に各色彩ともに「アルミ製縦格子」との組み合わせに集中し、「アルミ製縦格子×濃茶系色」の組み合わせが最大値(17.8%)であった。しかし「薄茶系色」に限り、「鋳物風装飾」との組み合わせの方が高い値を示し、他の手摺部形状との組み合わせも多く比較的値が分散する結果となった。

・組み合わせ<L> (屋根形状×タイル使用面積)

屋根形状の分類で全件中約半数が「陸屋根」に該当したため、ここでも「陸屋根」との組み合わせに値が集中



※外装箇所の形状分類各々に該当する件数を用いて、各外装部間でクロス集計を行い、パーセント(比率)にして示した表である。実線で括られた部分(計100%となる)をひと固まりにして概説を行っており、右図の凡例は本文と対応している。また網掛けした部分は、各部分類した形状に該当する件数を示している。なお、<バルコニー手摺部×バルコニー躯体形状>に関しては、「3-2-3.躯体形状と手摺部の構成」で類似した概説となるため割愛した。

図-14 全外装部間における各形状の関係

した。また「傾斜パラペット」の採用件数はタイル使用面積に反比例し、一方「傾斜屋根」の採用件数はタイル使用面積に概ね比例する結果となった。

・組み合わせ<M>（屋根形状×タイル色彩）

「陸屋根」との組み合わせは前述の理由のため高い値を示したが、それ以外で「傾斜屋根」×「薄茶系色」の組み合わせが突出しており、屋根形状が「傾斜屋根」である場合、タイル色彩は「薄茶系色」を選択しているケースが多い。

10. 小結

以上の結果により、各外装部の時代によるデザイン変化をより明確に捉えることができた。特に時系列グラフによる結果を踏まえると、各外装形状の組み合わせを二つのグループに分別することができる。

ひとつは、玄関部に独自のデザインを施していない「該当なし」、バルコニー躯体における「凹凸型（斜）」や手摺部の「鉄製縦格子」、屋根形状における「傾斜パラペット」、タイル使用面積の小さい「部分タイル型」「吹付型」、タイル色彩における「濃茶系色」などといった80年代頃を境に衰退していった比較的古いデザイン手法同士の組み合わせである。これらの共通の特徴は、コストを低く抑えることが可能で、比較的単純なデザイン手法ということである。

一方、新しく普及していったデザインのグループとして、玄関部における「ポーチ型」、バルコニー躯体形状の「曲面型」、手摺部の「鋳物風装飾」、「傾斜屋根」、「部分吹付型」、「グレー系色」などがあげられる。これらは、コストの増加が予想でき、「傾斜屋根」など付加していくデザイン手法が多いという特徴を持っている。

本論では、大局的にこれら前者のグループ（古いデザイン手法）から後者のグループ（新しいデザイン手法）への移行を捉えることができた。

また、年代を通して一定数採用されている玄関部における「庇型」、バルコニー躯体における「直面型」、屋根形状では「陸屋根」、タイル面積では「ファサードタイル型」などもひとつのグループを形成しているといえ、特に年代を通して約半数を占める「直面型」や「陸屋根」は、時代による変化をみせないマンション外装において最も標準的な形状といえる。

周知のように建築業界も例外なく近年のバブル全盛期、そしてバブル崩壊などをはじめとした景気の影響を受けている。これは、前回のアンケート調査によって、コストが外装デザインを大きく左右するという結果にも裏付けられた。また、80年代中盤以降に外装デザインの大きな変革期を向かえ、古いデザイン手法から新しく多様化したデザインへ移行していったことが考察として上げられた。これらにより、バブル全盛期という経済的に豊かな時期により、マンションの外装部における様々な付加したデザインの普及が容易になったことが推測できる。それは80年代後半の「傾斜屋根」や「全面タイル型」の急激な普及という結果に顕著に表れている。しか

し、この時期に普及していった形状は、バブル崩壊以降も引き続き採用されている。これは近年でもバブル期に出現した「ポーチ型」や「傾斜屋根」などといった新しいデザイン手法が採用されやすい傾向にあることから窺える。このことから、好景気などの要因により一度出現したデザイン手法は、不景気になっても容易に衰退しないという結果が導き出せる。

但し、バブル崩壊後、コストを抑えなければならなくなったのは確実といえ、同じデザイン手法でも unnecessary 部分の削除や質の低下など、設計者がデザイン手法を熟練することによってコスト削減法を身に付けていったことが予想される。タイル使用面積における「全面タイル型」を抑える形で「部分吹付型」が増加していることなどはそれらの要因によるものではなかろうか。また、装飾性のみの用途として用いられる玄関における「ゲート型」などの衰退も同様の理由によりそうである。

これまで第三章と第四章を中心に匿名建築（家）の実態解明のため、マンションの外装デザインを事例として論究をすすめてきた。第三章のアンケート調査結果を眺望すると、所謂有名建築（家）と大凡違いが感じられない。例えばコスト問題に関して、その影響の強弱の差はあるかもしれないが、両者ともに対し主要なデザイン決定要因と考えられる。但し、本章の分析結果からも推し量れるように、最終的にアウトプットとして出されたデザインは、有名建築物のそれと決定的に異なる。その相違は、序章でも『日経アーキテクチャ』から引用した「潮流後乗り派」と「潮流を作り上げようとする派」、つまりデザインの潮流・流行性に関する各建築家（設計者）の基本理念に強く起因すると思われる。第三章の小結でも触れたが、概ね匿名建築家とはその是非に関わらず建築デザインに保守的な対応を示す設計者であることが推測できる。第一章で本研究で取り扱う匿名建築について「ミドル・カルチャ」的な存在として位置付けたが、建築設計における保守性がハイ・カルチャたらしめない要因のひとつになっていると思われる。

本章では、匿名性の高い建築物に着目し、ひとつの市街地に現存するマンション全 326 件を悉皆で調査し、外装部の 4 つの要素に分けその時代変化を明らかにしてきた。本章に関連する今後の発展研究として、法的な規制や消費者の嗜好、維持管理面、使い勝手など外装デザインの採用要因となり得る項目について定量的に分析を行っていくことが重要といえる。また、マンションは未

だ数多く建設されており、今後の外装デザインの動向も追っていく必要がある。なお、本論では福岡市のマンションを対象に外装デザインの実態や時代変化について考察したが、今後はこの結果が全国的か否かも検証する必要がある。